

令和 2 年 5 月 25 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K14745

研究課題名(和文)有形・無形を問わない文化的景観の調査方法とその保護方法の提案

研究課題名(英文) Survey Method and Protection Method of Cultural Landscape Regarding of tangible and intangible Landscape elements

研究代表者

神山 藍 (Kamiyama, Ran)

東洋大学・理工学部・准教授

研究者番号：00598112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまでの記念物を出発点とする「文化的景観」の保護の調査研究とは異なり、有形・無形を問わない文化を対象として捉えることを目的として、紀行文、風土記、民謡、詩歌などの郷土文学からの風景の把握を試みた。

その結果、とりわけ民謡からは、気象に関する言葉が多く抽出できた。また、紀行文からも蜃気楼などの気象記述があり、能登地方の独自性と言える。これらは、労働者による日常の風景としての価値があり、これまで見落とされていた風景と言える。従って、本研究で提示した方法論は、これまで埋没していた日常の風景、土地の気候や地味を抽出できると言え、無形の文化的価値を探る手法としての有効性が認められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、先人が自然を注意深く観察し、育んできた地方の言葉に着目し、文化的景観を明らかにする。これまでの有形物を中心とする文化的景観の抽出方法とは異なり、有形無形を問わず日常の文化的景観の抽出方法を提示する。また、本研究は、風景を表現する用語のテキスト分析を定量的に行うことに加え、抽出された語あるいは語句は、地理空間情報システムによって空間情報として整理される点においても従来の研究とは異なる。口承ないし筆記による郷土文学を文化的景観の抽出対象とすることで、これまで埋没した可能性の高い「身近な景観」の把握を行うことは、今後の文化としての景観を保護し議論する上で学術的意義が高い。

研究成果の概要(英文)：This research differs from previous research on the protection of "cultural landscapes" starting from cultural monuments, with the purpose of catching tangible and intangible cultures as a target. I tried to grasp the scenery from local literature such as folk songs and poetry.

As a result, we were able to extract many words related to weather, especially from folk songs. In addition, there is a description of the mirage in the travelogue, and it can be said that it is unique to the Noto region. These are valuable landscapes for workers, and can be said to have been overlooked. Therefore, it can be said that the methodologies presented in this research can extract the daily landscapes, climates, and soberness of the land that have been buried so far, and are effective as a method for exploring intangible cultural values.

研究分野：景観工学

キーワード：文化的景観

1. 研究開始当初の背景

本研究では、これまでの記念物を出発点とする「文化的景観」の保護の調査研究とは異なり、有形・無形を問わない文化財を対象として捉えることを目的として、地誌、紀行文、風土記、民謡、詩歌などの口承ないし筆記の郷土文学からの風景の把握を試み、これまで埋没していた日常の風景を明らかにする。特に、民謡を扱うことは、地域の生活や生業を知る上で重要であるとともに、本研究での独創的な点である。民謡には、郷土的なものが多く、その土地の風土や生活の色濃く反映していると言える。また諸地方の普遍性に富んだものや独特の発達を遂げたものなどがあり、それぞれの土地の固有性を示す資料として有益であると言える。能登地方では、現存する民謡だけでも 227 曲が確認でき、そのほかの郷土資料も豊富であるため、能登地方を本研究の対象地とし、日々の生活に根差した身近な景観を再認識する。

これまで、紀行文を題材に文学的あるいは、民族学的立場からの研究の積は豊富にあるが、本研究で取り扱う紀行文および民謡についての研究は少ない。さらに、これらを景観地理学的立場あるいは空間構造的な観点から考察した研究はほとんどなく、まだ広々とした未知数がある。特に、江戸期から数多くの紀行文が書かれている能登地方では、日記、風土記、詩集・俳書など様々な側面から書かれた紀行文があり、幅広い言葉の把握が可能である。

本研究の学術的な特色・独創的な点および予想される結果と意義は、先人が育んできた文化や山海の風景を注意深く観察してきた地方の言葉に着目し、文化的景観を明らかにしようとするものである。これまで、有形物を中心とする文化的景観の抽出方法とは異なり、有形無形を問わず歴史的な価値を有する文化的景観の抽出方法を提示する。また、本研究は、風景を表現する用語のテキスト分析を定量的に行うことに加え、抽出された語あるいは語句は、地理空間情報システムによってデータベース化され、空間情報として整理される点においても従来の研究とは異なる。口承ないし筆記による郷土文学を文化的景観の抽出対象とすることで、これまで見落とされていた可能性の高い「身近な景観」の把握を行う。定量的なテキスト分析とその結果を踏まえた空間的把握が本研究の学術的な特色であり、今後の「文化的景観」の調査および方法論の確立に役立つことが予想される。

2. 研究の目的

奥能登の重要無形民俗文化財として残る「あえのこと」と呼ばれる儀礼、東風を「あいのかぜ」と読む越中の方言、「あいの風」を唄う能登の舟唄、富山県の方で能登から吹く風を「能登アイ」と呼ぶ慣習、富山湾の藍色の海色を「あいがめ」と呼ぶ深海の地形など、先人が育んできた文化や山海の風景を注意深く観察してきた結果が辛うじて地方の言葉として残っている。このように日常の言葉は風景と深い関わりがあるにも関わらず、無形であるため、文化的価値として認め、位置付けることが難しい。現代の社会としては、それも止むを得ない現象と言えるが、風景学の分野においては、これを見過ごすには忍び難い。そこで、本研究では地方に残る言葉を頼りに、風景を再認識し、文化的景観として位置付け、その方法論を提示することを研究の目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、まず「文化的景観」の抽出するための方法として郷土文学に着目する。これまで、有形物を出発点とする方策が一般的であり、対象とする景観を地誌、紀行文、風土記、民謡、詩歌などの文学から探る試みは、従来の手法とは大きく異なる。対象とする資料には、郡郷の名、郡内の産物、土地の沃瘠、山川原野の名の由来、古老相伝の旧聞異事、蜃気楼などの独特の気象

などの記述があり、歴史的文化を幅広く捉えることができる。特に、紀行日記には、見聞録としての性格が強く、それぞれの土地の気候や地味などが詳しく述べられているものが多い。

また、文学の中で表現された風景や単語を抽出する方法としては、主観に基づいた抽出方法ではなかったが、本研究では、これを定量的に把握する方法としてテキストマイニングを援用する方法を検討する。これにより、出現頻度の高い単語、地域特有の単語、語と語の結びつき、共起ネットワークを明らかにする。また、データベース化されたテキストから文化と結びつきの高い単語や表現、環境を表現する単語、風景や場所の魅力を表す単語、地名表現を抽出する。

4. 研究成果

本研究では、これまでの記念物を出発点とする「文化的景観」の保護の調査研究とは異なり、有形・無形を問わない文化財を対象として捉えることを目的として、地誌、紀行文、風土記、民謡、詩歌などの口承ないし筆記の郷土文学からの風景の把握を試み、これまで埋没していた日常の風景を明らかにした。まず、紀行文については、漢詩体や旧仮名使いの多い資料のデジタル化および判読が困難である点はあるものの、一定の経路や場所性を把握する上では非常に有益な資料である（図-1）。また、地域ごとに使用頻度の高い言葉の抽出が可能である（図-2）。

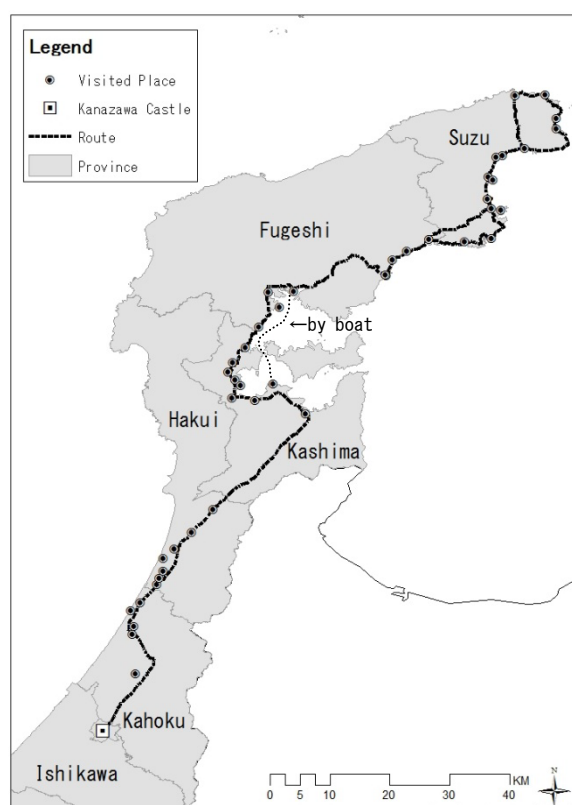


図-1 紀行文『能登遊記』の旅路

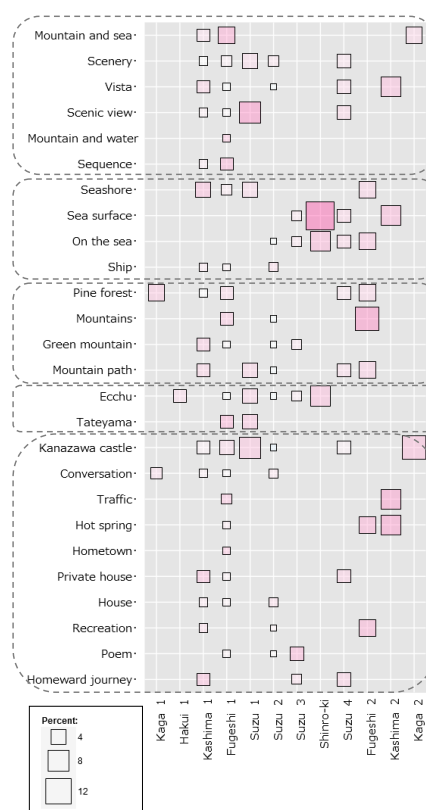


図-2 使用される言葉の頻度の高低（地域別）

また、紀行文の旅路を地形的に表現する言葉あるいは、場所の特性を示すために、「崎」「岬」「鼻」などの地名群が頻繁に表れる。能登半島には、図-3のように、海に面した岬地形に固有の名前が付けられている。これらの岬地形は、漁業や航海の際に漁師や船乗りが名付けた名であり、文化的景観を形成する要素として重要な用語であると言える（図-3）。

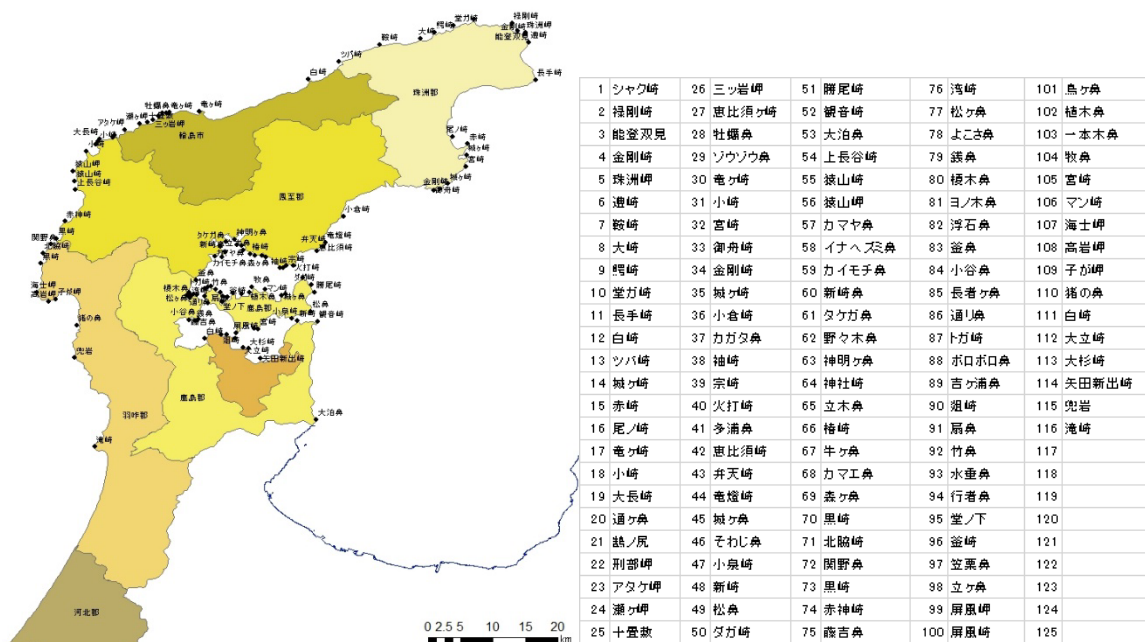


図-3 能登半島の「崎」「岬」「鼻」

民謡を扱うことについては、本研究の独創的な着眼点のひとつであり、これについての成果について述べる。民謡は、他の紀行文や詩歌が文化人によって創作されることは異なり、常民の生活が色濃く反映され、何より、常民の日常の風景を捉えることのできる資料と言える。

また、文字資料のデジタル化およびテキスト分析についても多くの利点がある。多くの紀行文は、漢詩体や旧仮名使いの資料が多く、詩歌については、古語が多く使用したテキストマイニングによる分析においては限界があると言える。一方、民謡については、常用の言葉が使用され、また時代や地方によって謡いやすいように修正される生きた言葉であるため言葉を拾いやすいという利点がある。また、本研究で対象とした民謡には、謡われる地方、種類、季節などが明らかである場合、頻度の高い単語を品詞ごとに抽出する単純集計、抽出語から内容が似る文書の群によって傾向を把握するクラスター分析、語と語の結びつきによる共起ネットワーク分析が可能であると言える。

例えば、地域別の特徴については、河北郡は、能登半島の首に位置し、西は、日本海に面し、東は、富山県との境となる砺波山が位置する。河北郡の特徴語としては、「牛若丸」「高松」「雲」「茶」が導出された。「牛若丸」は、津幡町指定無形文化財である「ちょんがり音頭」に頻出する。「ちょんがり」の唄は、3部構成であり、その一つが、「源平布引合桜、牛若丸の鞍馬下りのその物語り」についての時代物である。河北郡には、浄瑠璃や歌舞伎の演目として知られる「源平布引滝」の舞台となる倶利伽羅峠が位置し、源平の合戦で有名な地である。「高松」は、能登街道の宿駅であり、「当宿の南端には、口銭徴収のための口銭場があり、その付近に数件の茶屋があつて口銭茶屋と呼ばれていた（高松町史）」ことから、口銭茶屋などの特徴語が見つけられる。また、七尾市では、「木遣」「山王」などの特徴語が頻出する。

七尾市山王町には、大地主神社があり、通称は「七尾山王神社」であることに由来する。青柏祭の曳山行事として国指定重要無形民俗文化財に指定されていることからこの地域の重要な文化資産と言える。また、珠洲郡では、「酒屋」「越後」などの語が頻出し、現在でも有数の杜氏を抱える地域に由来するものである（表-1）。

これにより、民謡からは、従来取り上げられることの多い名所・旧跡や寺社仏閣に加え、郷土的な歴史文化や生業、その土地の風土や特産物が明らかになると言える。

表-1 地域別に見る頻出語（石川県の民謡より）

河北郡		羽咋郡		鹿島郡		七尾市		鳳至郡		輪島市		珠洲郡	
牛若丸	0.026	花	0.024	出る	0.023	曳く	0.046	見る	0.027	鶴	0.032	花	0.023
花	0.02	来る	0.02	晴	0.023	山王	0.037	咲く	0.023	鳥	0.027	人	0.02
松	0.018	水	0.018	花	0.023	木遣	0.037	花	0.022	亀	0.023	葉	0.017
水	0.018	酒	0.017	夜	0.022	遊ぶ	0.028	唄う	0.018	山	0.02	枝	0.017
咲く	0.018	今	0.016	見る	0.021	舞う	0.027	歌	0.018	坊	0.019	若衆	0.016
見る	0.016	名	0.015	聞く	0.02	月	0.025	来る	0.018	百姓	0.019	酒屋	0.015
高松	0.016	飲む	0.015	思う	0.019	日	0.024	山	0.016	良い	0.018	男	0.015
座る	0.016	娘	0.015	親	0.018	葉	0.023	出る	0.016	身	0.017	山	0.015
雲	0.016	山	0.014	歌	0.016	枝	0.023	嫁	0.014	松	0.017	あら	0.014
散る	0.015	殿	0.013	寺	0.015	来る	0.02	舟	0.014	水	0.017	越後	0.014

このほか、能登地方では、古くから漁業、航海などの海から恩恵を受けた独特の発達を遂げた文化があり、民謡からは海沿いの地方の固有性を示す唄が多い。例えば、七尾市の舟こぎ歌「あいの朝なぎ、下りの夜なぎ、ま風、たばかり、昼に風ぐ」のように、風をもたらす風の性質が詠われ、その漁師や船乗りの読み取る自然環境の恩恵とその恩恵を受ける労働および生活上での重要な側面が捉えられる。このほか「夏のアイと人夫は日いっぱい」、「あいの風と夫婦喧嘩は、夜におさまる」などの風をもたらす「あいの風」に関する諺や、好漁の風として認識する俚言が残るように、能登地方において、風の性質は海民漁獵生活や交易において重要視され、日常の風景として残る。このような気象は、絵図にも頻繁に表れると言える（図-4）。

本研究では、「文化的景観」の抽出するための方法として郷土文学に着目した結果、紀行文からは、これまで見落とされていた土地の地味、場所の特性を表現する細かな言葉、地域の気候が抽出できる。民謡からは、労働者の視点による土地の風景、地域の歴史文化、生業、特産が導出できる。とりわけ、民謡には気象に関する言葉が多く現れた。また、紀行文からも蜃気楼などの独特の気象などの記述があり、これらは能登地方の独自性であり、かつ日常の風景として重要視されていたと言え、これらを風景として再認識し、また無形の文化的価値として位置づけることには重要な意味があると言える。

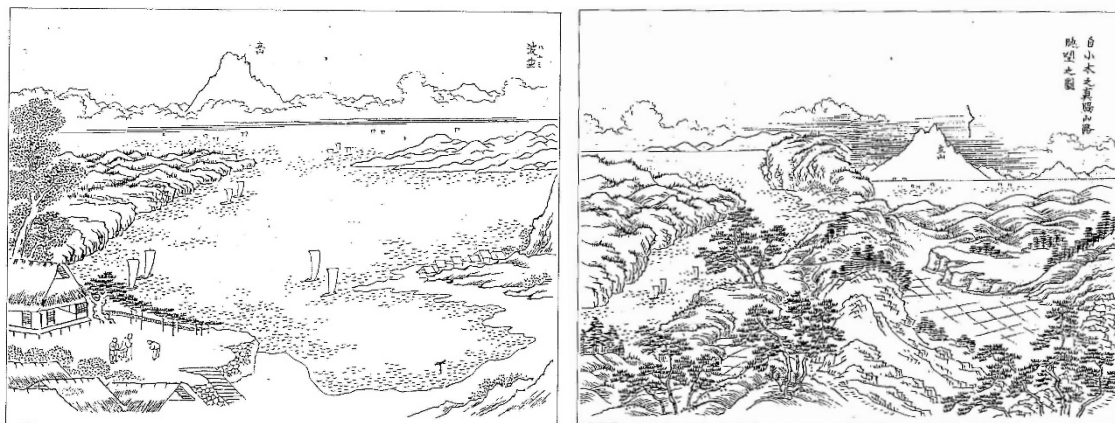


図-4 波並からの立山（左）、小木之真脇山路眺望之図（右）『能登遊記』より

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 神山藍	4. 巻 15
2. 論文標題 気象を源泉とする能登の気色 ― 観天望気に着目して ―	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 土木学会 景観・デザイン研究講演集	6. 最初と最後の頁 52-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 神山藍
2. 発表標題 気象を源泉とする能登地方の気色 ― 観天望気に着目して ―
3. 学会等名 土木学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----